学位論文電子化による早稲田大学リポジトリの更なる充実を目指して

図書館長
飯島　昇藏

早稲田大学図書館の最新のデータによれば、早稲田大学リポジトリ(DSpace@ Waseda University) に搭載されている学術成果の数は、年間約2,000件の割合で増えており、24,000件を超えるコンテンツが搭載されている。閲覧数も、年間約50万件～70万件、ダウンロード数は約150万件～200万件を数える。

ここで注目したい点は、DSpace@Waseda Universityに搭載されている学位論文の数がリポジトリ全体の中ではまだ6%にしか過ぎなかった2010年の時点においてすでに「ダウンロードTOP50を見ると、総ダウンロード数25万件余りの中、学位論文のダウンロード数は約23万件にのぼり、その割合は90%以上となって」[1]おり、学位論文は「早稲田大学リポジトリのキラーコンテンツといえる」と認識されていた事実である。この傾向は、昨年4月の学位規則の改正により、従来紙媒体での印刷公表が必要であった学位論文について、「やむを得ない事由」がある場合を例外として、インターネット上での全文公表が原則となり、オープン・アクセスが実現したことによって、今後加速度的に進むであろう。そしてこの傾向は歓迎されるべきことである。

「学位論文(博士) は、新進の研究者である学位取得者の研究成果であり、また、学位授与機関の大学院教育の成果でもある。内容的にも専門分野の最新の動向、多くの新しい知見を含んでいる」[2]。このような認識のもとに、図書館は早くから教務課および大学院の各研究科と連携しつつ、学位論文の電子化とオープン・アクセスに積極的に取り組んできた。しかし、いかにすぐれた研究成果であっても、他の研究者に読まれ、参照され、そして批判的吟味に付されなければ、その存在意義は高まらないであろう。自然科学の分野だけでなく人文科学や社会科学の分野でも研究者の裾野が世界的に広がっている今日、単に国内だけでなく世界に向けてその研究成果を知らしめるためには、インターネット上での全文公開によるオープン・アクセスは大いに役立つであろう。

ただし、海外からそれらの研究情報を検索しようとするとき、現状では致命的な欠陥があるように思われる。というのは、それらの成果に対して日本語以外の情報がほとんど付与されていないことである。これでは日本語を解さない研究者にとってこれらの

成果は、検索の対象とならないため「無いのも同じ」である。せめて（学位）論文の「タイトル」や「抄録(abstract)」や「重要な用語(key term)」の英訳くらいは付けられないものであろうか。国際化の名のもとに英語教育重視の方向に進むのであれば、国が率先してその道筋をつけるべきではないかと考えるが、いかがだろうか。否、国がやらないのであれば、本学が率先して、まさに進取の精神をもって学位論文をはじめとする学術成果の国際的発信に資すべきであろう。

もちろん英文タイトルや英文抄録などの情報を補う努力は著者自身による部分もあるだろうが、しかし図書館としてサポートできる部分があるのであれば、積極的に対応していく必要がある。検索の利便性を高めることは、すなわち利用者にとって資料に対する門戸が広がることである。電子媒体によってしか得られない情報が増えてゆくのであれば、そのための門戸を広げる努力を惜しんではならず、それこそが、真の意味での国際的情報発信であろう。そのためにも「早稲田大学リポジトリ」の更なる充実を目指していかなければならない。

参考文献
1. 「国立国会図書館による学位論文電子化と早稲田大学リポジトリ」、『早稲田大学図書館年報2010年度』、p.10.
2. 同上。